

随筆「マイケル」

上海にいる息子が、電話口で母親に向かってワンワンと大声で泣きわめいた。マイケルが亡くなったと、伝えたとのことだった。

マイケルは息子がまだ一歳の頃にやってきて、うちの家族になった。息子はマイケルのシッポにあやされて育った。それから21年間一緒に暮らした。マイケルはメス猫だったが、家へ来たとき当時三歳の娘が「マイケル」と呼んで、それ以外きかなかった。

マイケルは我が家の子たちにとっては、自然と第二の母となった。実際、子どもたちの成長の場面場面には、いつもマイケルがいた。マイケルは、幼稚園バスのお見送りとお迎えの常連だった。子供が近所の友だちのうちは遊びに行つて帰らないと、マイケルが迎えに行った。庭から窓越しにニャーと説教して子供を連れ帰った。姉弟げんかが絶えないので、マイケルはしょっちゅう間に入って両方を怒りつけた。母はマイケルを頼りにし、戦友のように思っていた。

うちへ来たとき一歳ぐらいのマイケルは若い美人ネコで、並みいるオスの中から一番不細工で体格のよい黒猫の子を五匹産み、全部貰われていった後、去勢した。それからマイケルの子どもは文字通りうちの子だけになった。

マイケルの晩年は足腰の弱ってゆくのか分かった。かつて若い頃は子供が外で遊んでいると、そばの木の下でペンまで登った。そしてそこから子どもを見ていた。雪深い岩手に住んでいたとき、かまくらを作るとその上に登って子どもが家に入るまでいたものだ。それが、家の中では、まず本箱に飛び乗れなくなり、テレビにも上れなくなり、テーブルに上ろうとして何度か落ち、椅子にも乗らなくなった。それでも時々思ひ出したように二階へ階段を一段一段上ってゆくとときは母が後ろから付き添った。

マイケルは餌も食べられなくなつて、本当に小さくなった。最後の一週間は水も口にしなくなった。そうなつた時は覚悟して下さいと、獣医から言われていたので、中国の上海にいる息子にも伝えた。そして、もう声も出ない。名前を呼ぶとシッポを動かして返事をした。最期の時、家族に見守られる中、顔を上げて一人一人に挨拶をしてくれた。それから静かに息を引き取った。大往生だった。箱に移して花を飾ると、「持ってくね。」と言つて、娘が二階の自分の部屋へ持つて行き、添い寝した。母は息子に亡くなったことを電話で伝えた。……

マイケルと暮らした21年間。それは、家族が幸せをもらった年月の足跡だった。